

## 鎌田茂雄氏の長逝を悼む

原 實

過去半世紀、共に学問に献身してきた古き友人として、又近くは新しい大学に共に職を奉じてきた同僚として、ここに謹んで弔辞を捧げ、君の冥福を祈る者である。

予てから君は身体を鍛えていたから、同年輩の者の中で一番長生きするであろうと皆が思っていたのに、平成一三年五月一二日、君は我々の嘆きをよそに一人冥界に旅立ってしまった。先立つ五月九日、関西出張を前にして私が病院に君を見舞った折、その変わり様は平常でなかったが、それでも私は君の手を握ってその温かい感触を確かめる事が出来た。それは未だ私の手の中に残っている。五月一五日、私は旧友の山口瑞鳳君を誘って君の骨挙げの儀式に参加したが、半世紀にわたる君との交遊を想起して感慨一入であった。

思い起こせば昭和二八年、我等三人はそれぞれ中国、チベット、インドと専門分野を異にしたが、共に学究の道に入った。君は戦後陸軍士官学校から円覚寺の朝比奈宗源師にその素質と人柄を認められ、師の紹介で宮本正尊博士の門下に入った。我等三人は以後ほぼ時を同じくして講師、助教授、教授となり、約三〇年にわたり東大に在って共に専心、研究と教育の任に当たった。縁あって一九九三年以来、私は君と再び同じ職場で新しい大学の創設にかかわったが、本式の学問を大事にする一点で常に意見が一致したのはこの上ない喜びであった。誠実な人柄は透徹した学問と常に平行し、私は一度も君から不愉快な思いをさせられた事がなかった。それは真摯な

学究態度と誠実な人柄の致す所であつた。

君は東アジア仏教の専門家として縦横に活躍した。高度に学問的な成果は日本学士院賞に輝く『中国華嚴教学史』であり、又未完に終わった『中国仏教史』であつたが、啓蒙書や報道機関を通じて君の果たした本邦読書界への貢献も計り知れない。研究者として私が尊敬して止まなかつたのは、君がこの二つを曾って混同する事になかつた点に在る。君はそれらを俊別して力の限りを尽くしたから、それは男らしく、はじめのはつきりした良心的な人柄を反映して、今尚それぞれに光彩を放っている。時に偽悪者の如く振る舞っていたが、むしろそこに私は君の男の美学、はにかみを見た。誠実さは君の本領で、約束に忠実であり、会議その他に曾って遅刻する事がなかつた。その意味で私は君と同じ場所に職を奉じる事を喜びとし、誇りにし、又全幅の信頼を寄せていたのであつた。

五月二五日、私は御遺族の許しを得て、尙未だ学究の習氣の漂う君の書齋を訪れた。四つの机は南方熊楠の流儀に従つたものと聞いていたが、それらははじめを明確にして力の限り精進した君の姿を目の当たりさせるものであつた。残した仕事をそのままにして、再び帰る日を夢見ながらこの書齋を後にしたのは何時であつたのであろうか、それを思うと胸の詰まる思いである。病院にあつても、何時もこの書齋を思い出していたに違いない、さぞ君は無念の思いであつたらう。それを思うと私は君の事が可愛そうでならない。でも、君は多くの後継者を残して逝つた。彼等は必ず君の遺志を継いでくれるものと私は確信している。そして私も君の学究の氣を受けて、残された人生を専心学問に捧げたいと思う。

(編集付記) 平成一三年六月一八日に執り行われた鎌田茂雄教授の本葬儀において読まれた弔辞を掲載させていただきます。